

世界中の“子どもたち”を 抱きしめに行きたい。 それが、私の幸せなんです

白いブラウスの袖口から、
細い腕がのぞく。
屈強な男性たちと交じっ
て、世界のオフロードレース
で活躍してきた女性ライダー
ライバー、だと聞いていた。
しかも、世界一過酷といわ
れる、あの「パリタカ」をな
んと5回も完走してきた、と
も……。

ところが、指定された東京
・赤坂のホテル・ニューオー
タニの一室で、記者を出迎え
てくれたのは、身長150cm、
体重はおそらく40kgにも満た
ないだろう、驚くほど華奢で
小柄な女性だった。

その女性——能城律子さん
(73)は、このホテルの3階で
35年にわたり、ベビールーム
「タイニータツ」を運営し
てきた。ベビールームは、今
でこそ「子どもの一時預かり
所」としてすっかりおなじみ
になっていくが、実は、能城
さんが日本で初めてホテル内
にベビールームを開設した女
性でもあるのだ。

「わざわざ足を運んでいただ
いって……ごめんなさいね。さ
どうぞ、お入りになって」
眼鏡の奥の優しい瞳に迎え
られ部屋の中に入ると、可愛
らしいベビースタンドが並ぶ、
日当たりのいいベビールーム

で、2人の男の子が、おやつ
のフルーツケーキを食べなが
ら、アンパンマンのDVDに
見入っていた。
「センセエ、あのコ、ドキン
ちゃんていうんだよ」
男の子たちはこのベビール
ームの「常連さん」で、週に
1回、母親が買い物の合間に
2時間程度、預けていくのだ
という。
「基本的には一時預かりなん
ですが、場合によっては、お泊
まりということもあるんで、
正確には365日年中無休と
いうことになるのかしら」
と微笑む能城さん。優し
い園長先生、といったその表
情からは、彼女が10数日もの
間、汗と砂にまみれて砂漠を
駆け抜ける姿はとうてい想像
できない。

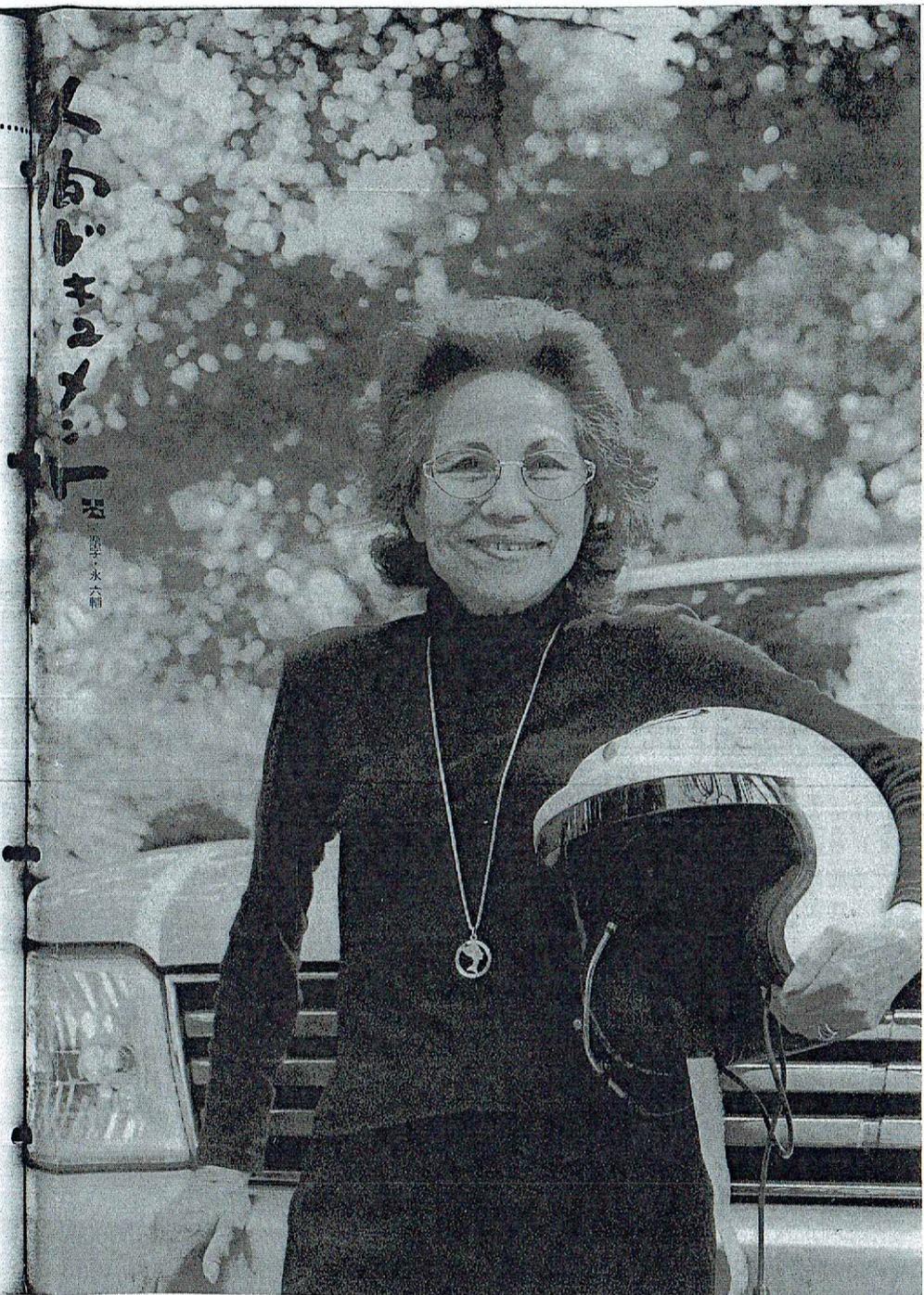
能城さんはこれまで、10数
年間で計15回も、パリタカを
はじめ、マスターライバー、エ
ジプトライバーといった世界で
も名だたるオフロード・レー
スに出場、人間の限界に挑戦
してきた。

しかも、驚くことに彼女が
レースを始めたのは59歳にな
ってから。
「単に運だけを競うスビー
ドレースと違って、自然その

世界に物資と愛を運ぶ「国際宅配おばさん」

能城律子さん 世界最高齢の国際ライダー

屈強なドライバーが熾烈な争いを繰り広げるラリーレースの世界に最年長で参戦した女性は、「日本人」だった。
託児所のはしりともいえる施設を30年以上にわたり運営しているが、預かった子どもが突然死してしまう悲劇を経験。
自身も、若いときから子宮ガンや乳ガンをはじめ「病気のデパート状態」だった。自分の子どもを持つことは、なかった。
しかし、いま、世界中の「子どもたち」に愛を届けるドライバーになった——



ものが相手になるオフロードラリーには、決まったコースもなければ、平坦な道もありません。そこには岩があったり砂漠があったり。でも、その中でふときれいな花を見つけたことがあるのね……砂漠の中でも決してくじけず逆らわず、自分の生命を守り続ける一輪の花。そんな花を見るたびに私たちはみんな自然の中で生かされているんだな、始めた。

「死にたかった」事件……

35年、東京で生まれた律子さんが、戦火を逃れて長野県白馬に疎開したのは、7歳のころ。

その後、高校卒業までの間、北アルプスの峰々に囲まれた大自然の中で、おおらかな春期を過ごすことになるが、そんな律子さんが突然、病魔が襲ったのは、小学5年生のときだった。

「肺門リンパ腺という、いまという結構ですね。それで1年間、学校を休学することになったんです。身体も小さくて、高校に上がるまで小学校3、4年生くらいの身長しかなかったのよ」

けれど、運動神経は抜群で、バレリーナを夢見て本格的なレッスンを受けたこともあつ

つて、すると、今を一生涯懸命生きなきゃ、っていう勇気がわいてくるじゃないですか」

還暦を目前に控えて過酷なレースの世界に飛び込んだ能城さん。そんな彼女には、長く厳しい波乱の半生があった。

「少し長くなるけど、聞いてくださるかしら？」

そう呟くと、能城さんは、小さくひと思いついてから話し始めた。

ふたつのガン以上に

たが、20歳のときに来日したボリスヨイバエ工団を新宿コマ劇場に見に行つて……体形も技術的にも、とても私には無理だなんて……

バレエの道をあきらめた律子さんは、親戚が経営するクラシックレコードの輸入販売会社の経営に参加。

「未練はありませんでしたね。私、昔から思い立ったら一直線だけど、終わったことは決して振り回らないから……」

実はこの究極のプラス思考が、彼女の後の人生を救うことになった。

その後、23歳で独立した律子さんは、楽器の付属品の輸入販売会社を興した。が、楽器自体が高価な時代だ。部品

の需要はほとんど1年後には3000万円もの借金を抱えることになってしまつた。

そこで部品販売をやめ、ベビー用品やアクセサリーのほか、日本製カメラの輸入販売を始め、ストレスと疲労で胃潰瘍や肝臓結石をたびたび併発。それでも

「社会に出る時に母と約束していたんです。何があっても絶対に、他人に責任を押しつけちゃいけないって。だから、当時は睡眠時間2時間で、お盆も正月もなし。本当に365日駆け回っていましたね」

そんな生活が10年続き、ようやく借金を全額返済し終わったとき、律子さんは33歳になっていた。

ところが、仕事も軌道に乗ったとき、社員も10人ほど雇うようになった。律子さんは経営からスパッと手を引いて単身、ヨーロッパへと旅立つことになる。

「だって、10年間、借金返済だけを考えて働いてきただけ

よ。ほとほと疲果れてしまつたのね。だから、借金を返し自分つたらか自分なくちゃって……。それでしばらく日本を離れることにしたんです」

南米、ヨーロッパ、アフリカと1年をわたり65か国を回り、まさに、10年分のバカンスを満喫した律子さんが、そんな幸せな気分もつかの間、最後に立ち寄ったハワイで激しい腹痛に襲われ、緊急帰国することに。

「診察を受けると、子宮筋腫だといふんですね。でも当時のことだから、検査も不十分でね。結局、手術したときに子宮ガンだとわかって。万全を期すために、摘出しまして、つて……」

言葉にすれば、あつけないものになつてしまつてもいい。律子さん自身も、「終わらなことをよくよ悩んでました。でも、それが35歳の女性にとって、それがどれほど大きな衝撃だったかは、想像に難くない。

そんな律子さんに、希望を与えてくれたのが「ホテル・ニューオータニ」幹部からのベビールーム開設の申し出だった。

「これからのホテルではサービス業として子どもの時間預かりが必要になる。ぜひ、あなたにやっていただきたい」

さつそく小児科医に相談、専門家の意見を取り入れながら、律子さんが世界で初めてホテル内ベビールームをオープンさせたのは73年のことだった。とはいえ、



「院さえきわめて困難」といわれるバリアリタイヤより先定回数が出る



乳ガン手術で広範囲にわたる切除をした影響か、能城さんの腕と手は驚くほど細い

術は12時間にも及び、さらには「手術では右側の乳房を摘出する」と聞いていたのに、なぜか左右の手が動かないんです。しかもマジックテープでグルグルに縛られていた痛みが絶えず襲つてきて、いったい私の身体はどうなつてしまったの、つて……」

頭の中を不安が駆け巡り、まんじりともできない夜が続いた。手術から3日後、主治医は、律子さんに告げた。

「お気の毒ですが……、両方駄目です。1週間後から、放射線治療に入りますよ」

ガンはリンパ腺にも転移していたため、その広がりを防ぐため、両方の乳房、そして背中から上腕にかけての筋肉まで取り除かれていたのだ。律子さんは、42歳。姉の道江さん(75)が述懐する。

「子宮ガンに次いで、今度は乳ガンです……ショックは大きかったと思います。ただ、昔から泣き言はいわない人でしたからね。あの時も、子どもどころか病気がかりでお母さんには心配かけてきたから、手術したことは絶対にいわないで、つて……。自分のことより母のことをずっと心配してしまつてね。そんなこともあって、母には最後まで、ガンのこと手術のこととも知らせませんでした」

亡くなった律子さんの母、初子さん(享年81)は、自分のことより、まずは母とたち、という明治の女性で、いつも病弱だった律子さんを「私が代わってあげられるものなら……」が口癖だったという。

母にこれ以上、心配はかけられない。そんな思いもあつた。そして、またも律子さんを救ってくれたのが、究極のプラス思考だった。

「これまでもいろいろな病気を患ってきたし、よくよ病たつて元の身体に戻れるわけではないし……。だったら、乗り越えていくしかない。ここからがスタートだ、受け入れていくしかない、つて」

だが、手術で胸の筋肉を切除したため、両腕にはまったく力が入らず、

「おかずを箸でつまんでも、なかなか口に入れないんです。しばらくは蛇口もひねれず、ドアノブも引けないよ

「完全成功報酬型」

過払い金返還代理人

早いが一歩!

過払い金は返してもらえます。あくまでも払いすぎた利息です。から。

相談時間：平日 9:00AM~8:00PM
土曜・日曜 10:00AM~6:00PM

朝日ホームロイヤール

朝日ホームロイヤール

03-5297-4951

東京都千代田区神田田町4丁目8番地 朝日ビル10F

が楽かな、と思ったこともありませんでした。でも、ひとつ何か解決して、これでやっと死ぬる！と思つていて、また次の事件が起こつてしまつて……。おかげで、病気のこ

還暦を前に、世界の子どもたちのためにも走る

選層を目前にした、ある日のことだ。

新聞の中にある広告が、ふと律子さんの目に止まった。「パリ・モスクワ・北京ラリー」そこには、パリをスタートし北京に至るまで、ユーラシア大陸を横断する壮大な自動車レースの模様が掲載されていた。

瞬間、律子さんの身体を何が走り抜けた。そして、かつて訪れたアマゾン流域や、アフリカのジャングル、中東の砂漠……。さらには情勢不安で入国できなかった中央アジア諸国の記憶が次々と蘇つた。

「このレースに参加すれば、入れなかった地域に行けるかもしれない」

動機は単純なものだった。とはいえ、

「ラリーに出るためには国際A級ライセンスが必要だということすら知りませんでしたからね。で、1年間、茨城県

とをくよくよ考えている暇なうてありませんでしたよ」人生をのみ込むような大きなうねりが過ぎ去つた時、律子さんはすでに50代後半を迎えようとしていた。

のつくばサーキットへ通うことになったんです」

25歳で免許を取つて以来、「車の運転が大好きで、大阪あたりなら平気で日帰りで行き来していた」

という律子さんだ。F1レーサーを目指す若者たちの中でも、まったく動じることとはなく、50歳にして見事、国際A級ライセンスを取得。最初

に選んだのが、'94年のオーストラリアでのサファリラリーだった。しかし、



国際A級ライセンスを持って、子どもたちのことを思うと気持ちはずまらない(イラクにて)

直接ふれあうことができた。そして相手を理解することができた。それでいいじゃないですか。そう思うし、それが私の幸せなんです」

どんな状況でも子どもには「愛」を

振り返れば、律子さんの半生は、病気をはじめ、多くの試練の連続だった。

それでも負けずに、日々闘い続けてこられたのは、むしろ家族の支えがあればこそ。もうひとつ、傷つき、くじけそうになった気持ちを癒してくれたのが、子どもたちの笑顔だった。

その証拠に――



ホテル・ニューオータニの「タイナータツツ」で、子どもを見る目には愛があふれる

れず、しかも腕が前方にしか上げられなかったため、ギアチェンジが素早くできない。そこで小指3本でハンドルを握る方法をマスターし、レースに臨んだが、デビュー戦ではルールを間違えて失格。今度は、見事5500キロを走り抜き、総合9位でゴールインする。

そして、3か月後の12月30日には、スペインのグラナダ

を出発して、モロッコ、モリタニアなどを経由してセネガルの首都ダカールに至る第18回「パリ・ダカールラリー」に最年長の女性ドライバーとして出場。初参戦にして、なんと275台59位という快挙を成し遂げることになる。

オフロードラリーは全行程の総合タイムを競うものだが、毎朝、出発時刻が定められて、出発30分前にスタート地点

にいない車は失格になるんですね。だからギリギリに着いたら、休みなしでそのまま走り続けなくてはいけなくなるんです」

実は律子さん、'99年のパリダカではこのパターンに陥り、なんと3日3晩一睡もせずに走り続けたこともあったのだとか。しかも、砂漠のラリーでは、盗賊のターゲットにされることも少なくない。

外泊しがちな夫に対する妻のストレスは、いつしか彼女を追い詰め、それはひとり息子への暴力という形で現れるようになる。そのアザは、明らかに虐待の痕だった。

ある日のこと。男の子が父親に連れられてベビールームへやって来た。

「妻が入院することになったので、しばらくの間、子ども

の世話をお願いできないでしょうか」

父親の表情からすべてを察した律子さんは、さっそく男の子を預かることにした。

その日の夜、ベッドに身を横たえる男の子が、律子さんを見つめながらいった。

「先生のお顔、お母さんに似てるんだ」

「へー、じゃあ、お母さん、美人さんなんだね」

「お顔、見てないかい？」

「うん、いいよ」

美容医療 相談・紹介センター

ABC

11年の実績
万全の安全
万全の安心

聞いてみませんか?

二重・隆鼻・ワキガ・多汗症 審美歯科 矯正・インプラント
シミ・シワ・タルミ 豊胸・脂肪吸引 美脚・金の糸美容術

お客様の生の声を大切にしています。

ABC

全国ネット

0120-889-902

営業時間 10:00~20:00(年中無休)
info@889902.com

ホームページ <http://abc1.jp>

「私も1度、銃を持った強盗団に襲われて、幸い大事には至りませんでした。持っていた荷物を洗いざらい持つていかれたことがあって……。命の綱だった薬を取り上げられたときは本当にどうなることかと……」

それでも、これまでのリタイアはたったの3回だけ。「あとはピリケツでも、なんとかゴールしているのよ」と律子さんは笑う。

レースに参加しようという目、目の当たりにしたのが、劣悪な環境の中でひたむきに生きる子どもたちの姿だった。パリダカでモリタニアを抜出した時のことだ。

「休憩地で朝食をとっている。生後7〜8か月の赤ちゃんを抱いた母親が近づいてきて、見ると、その赤ちゃんの身体には無数のハエがまっつわりついでいて……。でも、私



「子どもはどんな状況でも、愛を感じれば笑顔を見せてくれます。どんな場所で育つても、温かい親の愛に守られるがら生きているかぎり、笑顔

を忘れることはありません。南米のアマゾンでは、オムツもつけていない赤ちゃんがいます。でも、そんな環境の中

でも必死に子育てしているお母さんがいる。いま日本は平和で豊かになったけど、一方で、子どもを愛せない母親が増えてしまった……。確かに子育ては365日、24時間待

つたなし。イライラすることもあるでしょう。

私がベビールームを始めたのは、そんなお母さんたちを少しの時間だけでも、子育てから解放してあげたいと思っ

たから、ストレスを解消したら、また子どもを抱きしめてもらいたい。子育てに理屈はいりません。ただ、ギョッと抱きしめてあげればいいですから」

「これからの「人生」というラリイはまだ続くことだらう。その向こうに子どもたちの笑顔があるかぎり。

取材・文 山崎 聡
撮影 加藤 一郎